

「変わろ」の中で

Everything changes, and what about you?

SapporoPhoto 2023

レポートブック／公募参加型写真展 作品集
Report / Open call exhibition Photography Book

『
変われば』
『
変わるとき』

『
変わる』
『
変わりたい』

2019年から2023年へ。
何が『変』わり
何が『変』わらなかつた
あなたは
わたしは
...

2015年から開催を続けている[SapporoPhoto]は、開拓の当初より当時の最新技術であった写真を公式記録手段とし、写真家のみならず多くの市民の手で都市発展の姿が克明に記録・蓄積されてきた世界的にも稀有な大都市である札幌の歴史と資産を現代・未来に活かすとともに、カメラを手にするすべての人を主役とする「写真の祭り」として地域の写真文化発展に寄与することをめざし、地域のみなさまと一緒に毎年秋～冬にかけて作っているイベントです。

すべてのものごとは、そしてそれを取り巻く人々も、常に変化を続けています。その記憶は時とともに更新を続けながら、遠ざかり薄らぐことはあっても消えることなく残り続けます。それを補い、変わることなくあり続けていくのが、記録です。記憶と記録は両輪として行ったり来たりを繰り返します。その上に立つ私たちは、変化を自分の意思で感じ取り、進む方向を探しているのかもしれません。その手にカメラを持てば、みんなが記憶の記録者となれるのではないかでしょうか。

[SapporoPhoto]では、2017年の第3回から開催を続けている公募展で、私たちのそばにある風景のいまを持ち寄り、共有しています。その過程で、この僅か数年間に起きた、想像を超える「変」……大きなニュースの一場面だけではない、一人ひとりの日常の瞬間の中にもたくさんあった「変」を共有することで浮かび上がってくるものがあるという思いを深めています。今年のタイトルは、お寄せいただいた写真とそこに添えられたメッセージをもとに決めたものです。

札幌の文化芸術の拠点・SCARTS(札幌文化芸術交流センター)を2年ぶりに会場とし、私たちの中にはますます身近なものとして存在する写真の力を、日常の中から再発見する3日間を作ってくださったみなさまに感謝いたします。

街、もの、こと、価値観、時代、そして私たち……これからも日々“変わる”中での新鮮な発見をご一緒に持ち寄り、未来に残していく機会と場を作りたいと思います。



SapporoPhoto 2023 公募参加型写真展

「変わる」の中で

Everything changes, and what about you?

2019年、[SapporoPhoto]は「あなたの見た平成時代最後の一日と、令和時代最初の一日を写真に撮ってください」と呼びかけました。この時寄せられた写真には、何かがガラッと変わるような感覚の景色よりも、たとえ元号は変わっても私たちの日常は途切れることなく続いていく……という光景が多かったのでした。

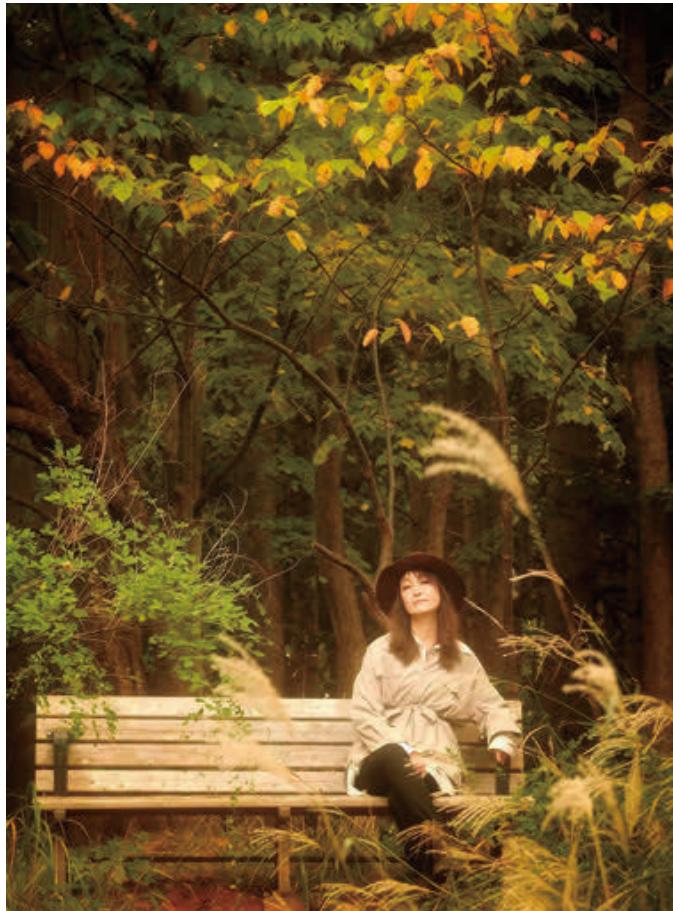
そんな令和という新時代も、すでに5年。まさかこの間に私たちの生活、暮らし方、ものの考え方、未来への展望がこんなにも変わるなんて、きっと誰もが想像できなかつたことだと思います。

「変わる」ということには、ポジティブな面もネガティブな面もあります。でも、私たちは毎日刻一刻と未来に向かっています。毎日が、「変」の連続です。

変わる、変わりたい、変わる時、変われば……。この令和の5年の間で「変わった」と感じているもの、こと、景色、私と誰か……を、40人が持ち寄りました。

変わっていくことと、変わらないでほしいことの間で、私たちは生きています。その間に写真が、カメラがあることで、この「変」の時代を私たちはもっと楽しんでいくことができるかもしれません。今日は、昨日とも、明日とも違う一日なのですから。

- 作品のタイトル、キャプション(コメント)は句読点・改行の修正、明らかな誤字、地名の誤りの修正を除いて原文のままとしています



変わりゆく季節

鈴木 文隆 (50代／会社員)

夏から秋へ変わりゆく初秋の風景を人物と共に写してみました。

時代は変わろうとも巡る季節に変わりはないと…

自然な関係

三上和仁 (50代／学生)

コロナ禍で、写真を撮るのも、ままらなかったから、逆に、久しぶりのモデルとの関係は、自然な感じになりました。写真が楽しいからというのを、共有できたからかな。





ESTAの階段

Sugi-san (50代)

古い建物がどんどん壊され、変わっていく札幌。高齢者にとってはどちらかというと寂しい。

8月31日に閉店したESTAの階段は昭和感が残っていて好きでした。

すすきの交差点・2020

らいちゃん（30代／写真家）

令和の「変」を語るとき、パンデミックを忘れる事はできません。

これは、2020年5月2日のすすきの交差点。わたしたちの暮らしが大きく変わった日々の中の一枚です。幾多の苦難を経て、少しずつ賑わいを取り戻したすすきの。そして変わりゆく札幌。右の建物や、野球場の広告にもご注目ください。





私と誰か

せきちゃん (40代／介護職)

いつも自分が写真を撮影する側でしたが、自分を撮影して貰った写真を応募してみました。
令和5年になり、変わったことです!

とりもどせないもの

松田 聰 (50代)

「変」は時として「無」になることもある。「形」として「無」になっても、記憶の中の「変」としてとどめておくことができる。そのひとつが写真なのかもしれない。





この窓から

翠

4年ぶりに帰省ができた
風景が、家族の姿が、自分の心象が
あまりにも変わっていて
久しぶりに話して見えた感情が、想いが、景色が
変わらずに佇んでいた
相反する情景、それだけで救われるものがある
窓の向こう流れる知らない景色のように
私は、変わっていく

変わりながらでも、いつかを想っていられるから

撮るという楽しさ

りう (10代／写真家)

被写体は私です。撮って頂いた写真なのですが、一瞬の表情や角度、日の入り方等それが揃わない限り、この写真は撮ることが出来ません。偶然に偶然が重なって出来る1枚の写真であると言えます。

コロナが収まってきた今だからこそマスクを外し自然な表情があらわれるのだと思います。





知床の朝日

徳永 康親

久しぶりの家族旅行の朝の散歩時に撮れた一枚。自然の大切さを学び始めた頃だからこそ撮れた一枚だと感じた。これからも自然と人とのつながりを写真を通じて広げていきたいと感じる。

遠い思い出をもう一度

@mayukkophoto (40代)

令和元年に行ったこの場所(海外旅行)が遠い昔に思えてしまうほど、コロナが長かったですし、大きな変化と影響があった5年間でした。





じーっと見ています、札幌。

山内 琴未 (30代)

外国人観光客がめっきり減って、ガソリンはとんでもなく高くなって、五輪招致は遙か彼方に飛んでいった。再開発ラッシュの札幌は進化する生き物のようだけど、道端の草花は何にも言わずに今年も咲いている。変わっているもの、変わっていないもの、どちらも同じだけあるのかもしれない。

静赤

太田 光弘 (60代／会社員)

毎年変わらず紅葉するモミジ。いつも人を惹きつける。





(ウルトラマン)コスモス

そうちゃん (保育園児／10代未満)

ウルトラマンコスモスの花だ！

(撮影者は平成最後の秋生まれ。令和5年には自分で写真を撮れるようになりました。)

セルфиー2023

レイちゃん（保育園児／10代未満）

札幌の街は私に似合っている。

（撮影者は令和4年の夏生まれ。カメラに興味を持ち始めました。）





地に繋がれて

坂本真介 (40代)

家族のためにこの土地を耕す父。そんな父も、年を重ね静かに変わりゆく。

cross paths 巡りあい

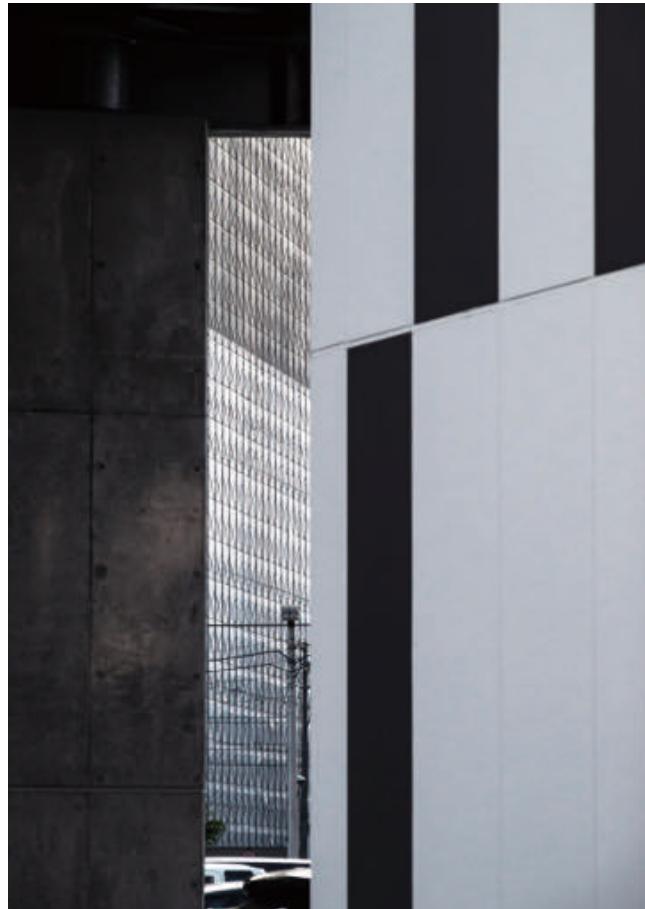
近藤 マリア ルイーザ明子 (60代)

鉄筋コンクリートの耐用年数は100年と言われている。

人も100年時代。

札幌では大規模な建物群の入れ替わりが進み、街で生活する人も常に入れ替わる。

昨日、今日、明日見る景色は、それぞれの100年周期の中で、一瞬の巡り会いだ。





Getting Better

伊藤 也寸志（フォトグラファー／30代）

2020年5月15日撮影

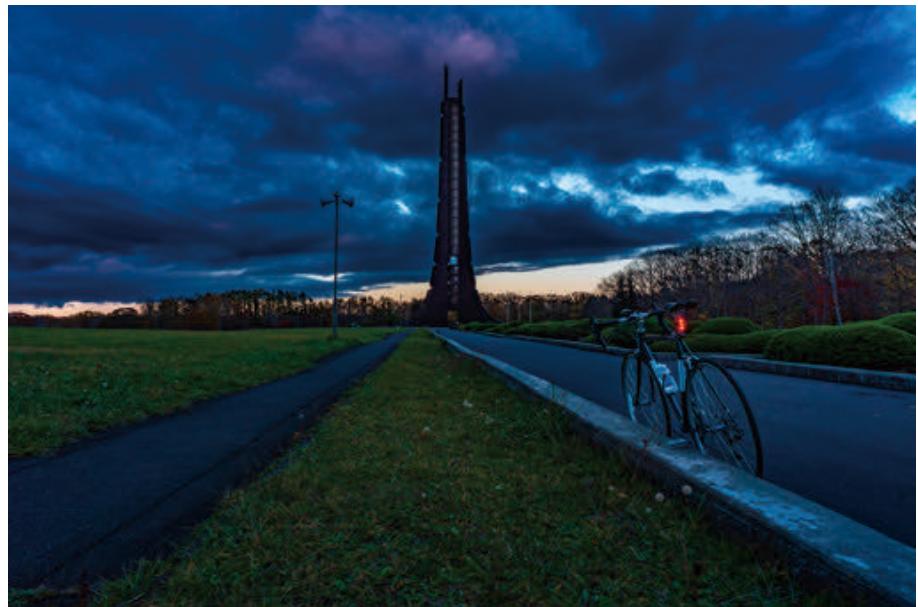
外出自粛要請が出され、札幌の目抜き通りにもほとんど人のいない奇異な光景が現れた。

あれから3年、そこにあった建物も無くなって表面的には何もかも変わったともいえるし、世の中何も変わっていないという気もしているが、少しづつ良くなっているとは思いたい。

塔の記憶

イトウ タカヒト (会社員／50代)

子供の頃からあったのに、無くなりましたね。変化を感じます。





はじまりのとき

カワ (60代)

ここ数年あちらこちらで建設クレーンを目にします。
見慣れた景色が新しいものに変わっていきます。
季節のはじまりはこれからも変わらないでしょうか。

二人旅

愛知まま（母）

最愛の夫と二人で旅した札幌、楽しかったなあ。
今は序列が変わり最愛の人は写真の彼。
彼の希望で旅した令和五年の函館の夏、最高でした。
また来年も二人で行くよ！ 休みの合わないパパはまた
お留守番(笑)





beautiful days

moe camera (写真家)

肌寒くなった秋の夕方に、同じ夢に向かって共に努力する素敵なカップルを撮影しました。
互いを信頼し尊重し合う姿はとてもキラキラして眩しく感じます。

空のグランド

とも（高校教諭／50代）

職場の隣の住人。近未来的な建物で、携帯で反射を作り撮影しました。





どこかへ

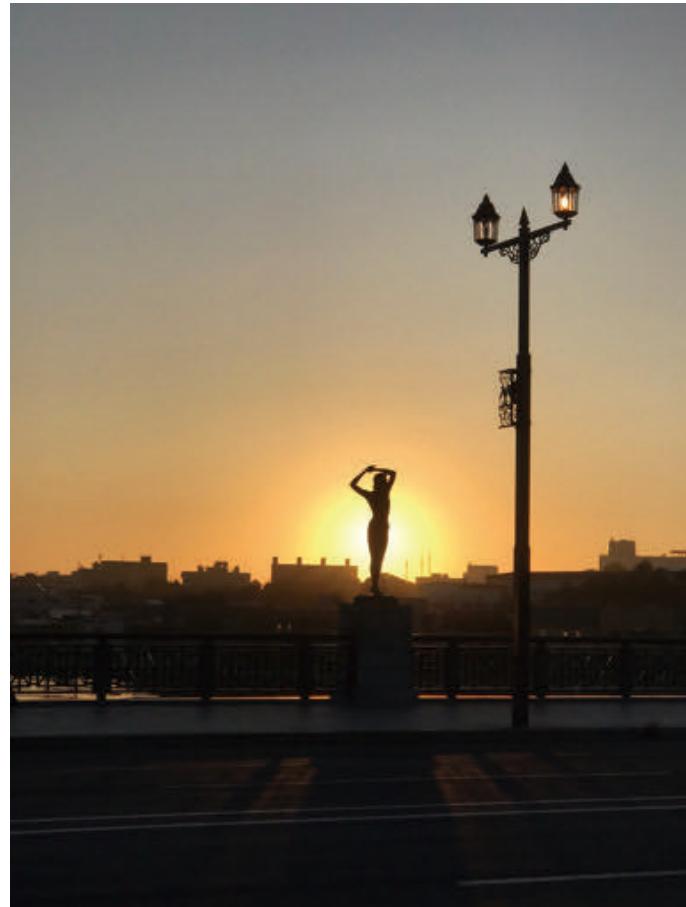
秋田 舞美 (40代)

これからどこに向かうのか、夜明けなのか夕暮れなのか。
この瞬間からの未来、「変」に思いを馳せる作品にしました。

黎明

山中 英美 (60代)

世の中の変動に心掻き乱される事なく
毎日昇る太陽のごとく自然との調和を大切にしたい。





待望の白線

花島 薫 (50代)

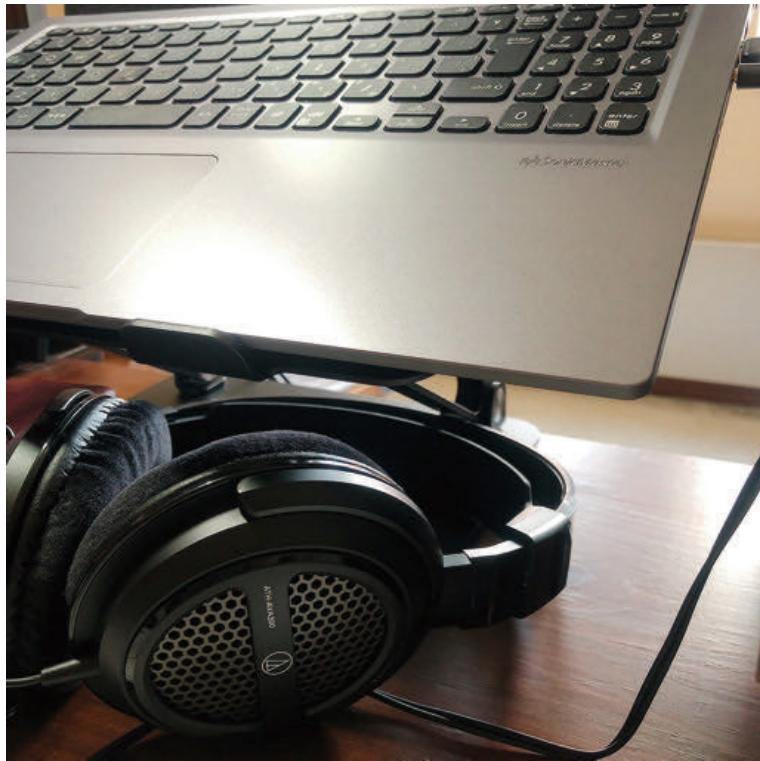
この道の変化です。

白線がずっとなく、待望の白線ですwww

はじめました

齋藤 由貴 (30代)

今年から韓日翻訳のお仕事をはじめました。
パソコンとヘッドホンと共に、新たな私がはじめました。





新・新札幌

のぞ (50代)

再開発によって、ここ2-3年で大きく変わった新札幌地区、今後の発展にも期待

変わらないもの

渡辺 可緒理 (40代)

人間の私たちは
コロナという魔物に
左右された三年間だったけれども、
「そんなの関係ないわ、知らないわ」
と言わんばかりに
花は
強く、美しく、逞しく、
咲いては散り、咲いては散りを、繰り返している。
どんな場所でも
どんな時代になっても





I unlimited.

ウリュウ ユウキ (写真作家)

やりたいことができない経験を誰もがした、この数年間。やり残してきたことが自分にはたくさんある。持ち続けていた、少し脇に置いていた夢を現実にしようと動き始めた。

次はどこへ行こう。このままでは終わらない。自分の制限を取り扱うこと、自分の行先に限界はないと決めたことが、僕なりの"変"。

いま大切な人と、
むかし大事にしていた場所が重なる時。
変わった気持ちに気付く時。。。。

miki...

38年来の友と再会した夏。誘われたbarは偶然懐かしい店。いま大切な人と、むかし大事だった場所が重なる。外は熱帯夜。もう少しここでギムレット。おかわりしたらグラスが変わった...Barのこういう佳さがわかる歳になったのかな。並ぶグラスのようにココロも今近づいた気がした。。。





勝利のVサイン

阿部 清太郎 (40代／会社員)

変化というテーマで思い出したのがこの建物。
今は様々なドラマが生まれるフィールドになりました。

故郷

川口 圭祐 (40代)

故郷の遠軽町にある瞰望岩。

この写真の3週間後に亡くなった母と神社に参拝に行つた帰りに撮つた写真です。





お気に入りの店が...。

関根 進 (50代)

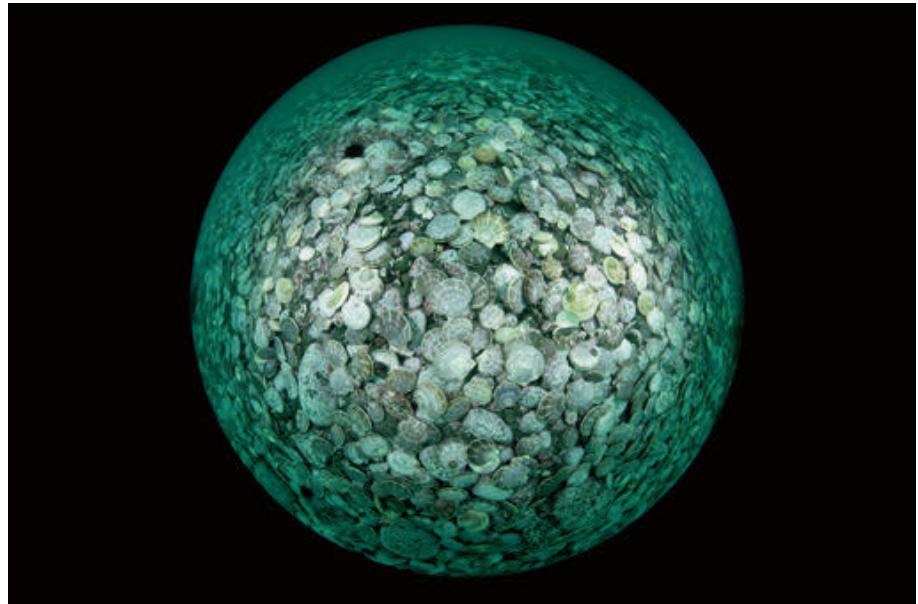
コロナ禍で残ったお店、無くなったお店もありました。
大好きなパンケーキとパフェをワンプレートで出してく
れたお店は今はありません!

Sphere of scallops.

平本 健太 (50代)

この数年で海水温が上昇し、水中の様子も激変しました。羅臼の水中、帆立貝大発生の様子です。

この構図は、水中写真家である知床ダイビング企画・
関勝則さんへのオマージュです。





光を残す

久保田 幸子 (40代)

この時代になって変わったのは、写真を撮るときの私のスタイル。

一枚一枚を丁寧に、目の前の光を大切に撮りたいという想いから、再びフィルムカメラを手にした。

平凡な景色であっても、心に残るような光が写っているといいな。

Self-Portrait

辻 博希 (50代／写真家)

閉塞した世界を変えたい。

しかし、世界はそう簡単に変わるものではない。
何かを変えたいとき、変わるべきはまず己から。
視座が変われば見える世界も変わるもの...





BLUE SKY

長谷川 規夫 (40代／写真家・団体職員・大学生)

航空業界にはLCCの破綻を含め、色々な変化をもたらした疾病禍であったが、空はなにもかわらず、ただそこにある。

2020年2月26日撮影

電車も共に

衣斐 隆 (40代／Photographer)

2020年、自身の家族環境の劇的な変化が起きた中で、未曾有のコロナ禍が日本中、いや世界中を襲った。電車にまでマスクをさせるなんて変だろうけど、それぐらい切羽詰まった空気感が至るところであった。





札幌ドームラストゲーム

中村 健太 (40代／写真家)

ファイターズの北海道移転元年からビール売りバイトに観戦にと幾度も訪れ、優勝や日本一の歓喜も味わった思い出深い場所

コロナ禍でずっと控えていたが、この日だけは行かずにはいられなかった

新球場にも訪れ素晴らしかったが「卒業」の寂しさも感じる

ドームの今後にもエールを込めて

縁 -Ryoku-

ChiikO (30代／カメラマン)

流れる毎日を過ごす中で、突然「緑(みどり)が足りない」と身体が叫ぶ。気が付かないうちに、疲労が溜まっていたことを感じた。それ以来、生活の一部に森林浴を取り入れリセットしている。こうした些細な変化が、自分にとっては大切なだと初めて知った。



講演 写真評論家 飯沢耕太郎さんがひとく 公募展の役割

2023年11月10日(金) 18時~

札幌文化芸術交流センター(SCARTS) モールC

●司会進行:中村健太

(NPO法人北海道を発信する写真家ネットワーク"THE NORTH FINDER"理事長)

●採録:佐藤優子(ライター)



[SapporoPhoto]では、2015年の初回より写真評論家の飯沢耕太郎さんに写真界の最新情報も含めた講演・執筆を依頼している。今回のテーマは[SapporoPhoto]の中心企画でもある「公募展」。

名だたる公募展の審査員を務め、「写真を見る」ということをライフワークとする飯沢さんだからこそ立てる視座から、日本の写真界に公募展が果たしてきた役割やその時代性について語っていただいた。

専門誌の月例写真から始まった 写真公募展の歩み

日本の写真界全体の動きから考えると、公募展の役割はすごく大きいですね。その歴史は明治時代から。大正時代にはアマチュア向けカメラ雑誌『カメラ』(アルス)が毎月写真を募集して誌面に載せるということを始めて、そういう写真は「月例写真」と呼ばれていました。

戦後の1950年代になると、『日本カメラ』や『カメラ毎日』『アサヒカメラ』といった専門誌が続々と創刊され、それと並行してカメラメーカーも公募コンテストを始めるようになります。今も続いている「富士フィルムフォトコンテスト」とかね。そう考えると、日本の公募展はすごく歴史が古いんです。

そこから大きく変わってきたのは、90年代に入ってから。徐々にアマチュア写真家向けの公募展では掬いきれなかった人たち、写真をアートとして考える美術系大学の出身者、例えば森村泰昌さんややなぎみわさんたちの活動が活発になってきます。

またちょうどその頃、写真を専門にするギャラリーや東京都写真美術館ができたり、川崎市民ミュージアムが日本で初めて写真部を設置したりして展示する場所の方も整ってきた。

そうすると、公募展もそうした新しく台頭してきた写真表現に対応するものが次々と生まれてくる。その中で代表的なものが、「写真新世紀」と「ひとつぼ展」です。僕はその両方の立ち上げから関わっています。どちらの審査員も務めたので、その話から始めますね。

“なんでもあり”の新時代公募展 キヤノン「写真新世紀」

「写真新世紀」は、僕が編集長で90年に創刊した季刊写真誌『デジャ＝ヴュ』と連動した公募展で、スポンサーはキヤノンです。92年に第一回が始まりました。大きな特徴の一つめは、それまでの公募展と違って応募作品の部門も、作品の大きさも、枚数も全て制限をなくしたこと。世間一般の人が「写真」と思う範疇を超えてほしくて、“なんでもあり”にしたんです。もちろん、応募者の年齢も性別も、国籍も問いません。

大きさの縛りを取り払ったものだから、第一回の優秀賞を受賞した今義典さんの作品なんてそれはもう大きくて。鉄のフレームに縦3m×横5mくらいの写真がハマっているものだから、これを展示会場に運んだスタッフさんが腰を痛めたというエピソードもあるくらい。いろんな応募作品が集まりました。

そして、もう一つの特徴は三人のレギュラー審査員です。僕、荒木経惟さん、そして現代美術のキュレーターである南條史生さん。南條さんは、現代美術と写真の境界領域を探るような応募者をフォローするために来てもらいました。この三人が第一次審査として各自飯沢賞とか荒木賞を決めるんですけど、この時一切協議をしない。非民主主義制なんです。

なぜなら合議制で選ぶと、平均点の高い人が選ばれやすくなってしまうから。1点を付ける審査員もいれば、満点の5点を付ける審査員も

いるくらいの議論を呼ぶような際立った作品よりも、皆が「まあ、いい」と思って3点を付けるような作品がグランプリになる可能性が高くなる。それって、ちょっとつまらないですよね。

そこを審査員各自の個性やものの見方を重視した非民主主義的な方法で回避しました。賛否はあったかもしれません、新しい時代の公募展としてはそのやり方でよかったと思っています。

デザイナー審査員の慧眼が光る リクルート「ひとつぼ展」

そしてこの頃、同じようなことを考えていたのが、リクルートです。リクルートはもともと学生向け求人誌事業で始まった会社なので、若手クリエイターを支援するメセナ活動として「ガーディアン・ガーデン」というギャラリーを90年にオープンし、そこを使った公募展「ひとつぼ展」を始めました。

初めにポートフォリオ（ブック）の一次審査があり、入選者10人が各自一坪（1.82m×1.82 m）のスペースを使って展示をし、公開審査でプレゼンをしてその場でグランプリが決定する。グランプリ受賞者は一年後に銀座ガーディアン・ガーデンで個展を開くことができる、という流れです。

「ひとつぼ展」の応募は確か、若手対象だから30歳以下の年齢制限があったと思います。ブックもB4サイズでした。審査員の特徴は、写真専門の人だけでなくアートディレクターやデザイナーたちも共存させたこと。写真の専門家は僕や平木収さん、操上和美さん、瀬戸正人さ

なんなどがいて、アートディレクター組は青葉益輝さんや浅葉克己さん。この人たちのものの見方が、写真評論をする僕たちとまるで違うのがとても面白かったです。

今でもよく覚えているのは、1997年の「ひとつぼ展」でグランプリを受賞した川内倫子さん。彼女のブックが実に素晴らしい、浅葉さんは「もう、このままプロになる」と絶賛したくらい。ほぼ満票で公開審査に残りました。

ところがです。川内さんの肝心のひとつぼ展示が、写真専門の審査員には全く響かないものだった。ブックが良かっただけに僕も平木さんもガッカリしたりして。僕の記憶だと、それでもデザイナー審査員たちが彼女を強く推した結果、3対2のギリギリでグランプリを受賞したと思います。

そして一年後の個展を見に行ったとき、僕は会場にいた川内さんに思わず謝りました。それくらいすばらしい展示で、驚くばかりの成長を遂げていた。もしかしたら、青葉さんや浅葉さんはそんな彼女の伸びしろを見抜いていたのかもしれない。感服しました。

…という経験があるので、写真展を写真の専門家だけで評価するのはちょっと難があるんじゃないかな、というのが今の僕の持論です。

**「写真新世紀」は三人の審査員が一切協議をしない。
合議制で選ぶと、平均点の高い人が選ばれやすくなってしまう。
「ひとつぼ展」の審査員はアートディレクターやデザイナーたちも共存させた。
この人たちの見方が、写真評論をする僕たちとまるで違うのがとても面白かったです。**

写真家の登竜門として定着 デジタル時代に使命を終えて

こうして回を重ねるうちに「写真新世紀」と「ひとつぼ展」は新しい才能を発掘する、写真家の登竜門的な公募展として知られるようになりました。受賞者のお名前を一部あげるだけでも、オノデラユキさん、大森克己さん、佐内正史さん、HIROMIXさん……。

ただお一人、両方でグランプリを受賞したことがある人は野口里佳さんかな。蜷川実花さんは「写真新世紀」では優秀賞で、「ひとつぼ展」でグランプリをとっています。その蜷川さんも含めて、ここから活躍し、のちに木村伊兵衛写真賞に輝いた人たちも輩出し、総じて日本の写真表現の可能性を広げるという意味で目覚ましい成果をあげた公募展だったと思います。

ところが2000年に入ってから、状況がちょっとずつ変わってきます。もはや写真を現代美術と重ねて語る視点が当たり前になり、なにより写真のデジタル化が一気に進んで、誰でも撮れる時代になってきた。写真表現が拡散し、自分だけの表現として磨き上げていくのがなかなか難しくなっていったんです。

それでも「ひとつぼ展」は2009年に「1_WALL」(ワン ウォール)という公募展に姿を変えて続きましたが、動画部門との共存に苦心したりして最終回の第25回が2022年に開催され、「写真新世紀」は2021年に終止符を打ちました。感慨深いものはありましたが、どちらも公募展として歴史的な使命は果たしたのではないかと受け止めています。

地方の活性化にもひと役 倉敷フォトミュラル

今はSNSで個人が簡単に発信できる時代です。その一方で参加型写真展は今もいろいろな形で続いています。北海道の東川町のように特に地方が頑張っている。の中でも僕がディレクターという立場で関わり長く続いたのが、岡山県の「倉敷フォトミュラル」です。

フォトミュラルとは、壁画(mural)のように大きいサイズに伸ばした写真のこと。倉敷といえば、大原美術館が有名な美観地区で知られていますが、そこから離れた駅前のアーケード街は全然人が来なくてシャッター街になりつつある。それをなんとかしようと倉敷市文化振興財団や倉敷商工会議所が始めた公募展です。

この公募展が20年間も続いた要因の一つは、メンバーの中に岡山

県立大学デザイン学部教授の北山由紀雄先生がいたことがすごく大きい。北山先生は僕と同じく日本大学芸術学部写真学科の出身で、非常に優れたアイデアマンでもあります。

誰でも参加できる応募写真を特大の布にプリントして、商店街アーケードに吊り下げる屋外展示にして人を呼ぼうと思いついたのも、北山先生でした。精度の高い布プリントは福井県にあるセーレン株式会社が「文化支援だから」と特別価格で提供してくださったり、岡山県立大学の学生有志による「SAKURA Project」が現場を担ってくれたりと、皆が力を合わせて運営する地方公募展の一つのロールモデルに成長していました。

審査員は僕一人で、誰がグランプリだとか一等、二等の等級はつけませんでした。それがまた良かったような気がしています。ただ、一人審査員である僕としては他のコンテストとは違う倉敷フォトミュラル独自の審査基準を設けざるをえなかった。というのも、「写真新世紀」や「ひとつぼ展」なら多少尖った表現でも歓迎されるけれど、こっちは商店街の店頭にギョッとするような写真が吊り下がったら、お店の人も困っちゃうでしょう？

そこで心がけたのは、生命力がある写真やポジティブな写真を選ぶこと。「写真新世紀」の審査では選びそうにない赤ちゃんやおばあ

「倉敷フォトミュラル」で心がけたのは、生命力があるポジティブな写真を選ぶこと。
巨大な写真になって商店街に飾られたら嬉しいじゃないですか。

ちゃんの写真も意図的に選んでいきました。自分の身内が巨大な写真になって商店街に飾られたら嬉しいじゃないですか。関係者が写真の下に集まって「これを撮った時はね…」なんて思い出話に花を咲かせる、そんなコミュニケーションが生まれたらいいなという思いで毎回やっていました。

今回のSapporoPhotoさんの公募展も「変」というテーマ設定がすごく良かったんじゃないですか。応募者の方たちが送ってきたキャプションがリアルだし、読んでいて身につまされるものもありました。倉敷では作品の講評会もすごくあたたかくていい空間だったので、札幌でもそういうことをやれると面白いですよね。いわゆるコンテストではない公募展で一番大事なことはコミュニケーションだと思います。写真を撮って発表することの喜びを皆で共有する。その積み重ねが写真表現の可能性を広げていく一つのきっかけになるんじゃないかなと思います。

「倉敷フォトミュラル」はその後、停滞期もありましたが、そこでもまた北山先生が画期的なアイデアを出します。テーマを「猫」にしたんです。北山先生が猫好きだというのもあるけれど、よりポピュラリティーのある題材にして応募者層の拡大を狙ったところ、これが当たって応募者数はV字回復。猫パワーです。

今回の[SapporoPhoto]のテーマ、応募者の方たちのキャプションがリアルだし、読んでいて身につまされるものもありました。

実際ね、僕も審査していてつくづく思いましたが、被写体として猫ほど面白いものはないんです。思っても見なかった表情や仕草をするので驚きが大きいし、何より応募者さんたちの情熱がものすごい。おかげで「倉敷フォトミュラル」は活動20年間の終盤にまた大きな盛り上がりを作ることができ、2023年に惜しまれつつも終わるという、すごくいい形で幕を下ろすことができました。

今、僕が現在進行形で審査員をしているのは、2022年から新たな体制になり、WEB公募になった公益社団法人日本広告写真家協会公募展(APAアワード)の写真作品部門です。審査員の顔ぶれも変わり、蜷川実花さんやアートディレクターの菊地敦己さん、優れたライターでもある写真家の大山顕さんもいて、すごく面白い。

このメンバーで審査にのぞんだ2023年のAPAアワードは、受賞者の大半が留学生を含む学生たちという、これまでにない非常にフレッシュな結果になりました。公募展やコンテストは時代時代のトレンドがあるわけで、そこをきちんとフォローできないと、賞としての意義や価値が無くなってしまう。その意味で新生APAアワードは、これから面白くなっていくと思います。

共感を呼ぶ「いいね！」写真か 「誰も見たことがない」写真か

こうした公募展に出して評価される写真と、SNS時代に皆が撮っている「いいね！」がつく写真はどこが違うのか。僕が思う「いいね！」がもらえる写真はね、既視感があるような「共感」できる写真です。かたや写真展で評価される写真は「誰も見たことがない」写真。初めて見るような驚きがあるかどうかを、僕は「写真新世紀」でも「ひとつぼ展」でも常に評価の基準にしてきました。

食べ物で例えるとわかりやすいかな。アラスカにキビヤックという伝統的な発酵料理があるんです。それは信じられないくらいの臭気を放つけど、すごく美味しいらしい。ということは、誰もが「いいね！」を押すわけではないけれど、好んで食べる人は確実にいる。それと同じです。

ただ、僕はどうにかして、その「いいね！」的な写真と、作家性のある写真の間にはしごをかけられないかということをずっと考えているんですが、残念ながらそこはまだうまく繋がっていない。

本来、写真は個人プレーでやるものですが、中学や高校で教わる

**キーワードは「自分で考える」こと。
自分で考えた思考の跡は必ず写真に出ます。**

チームプレーの写真をやってきた人が大学とかに入って個人プレーを求められると必ず戸惑うことになる。これまでやってきたことが通じなくて、どうしたらいいか迷ってしまうから。

写真甲子園でも他の学生公募展でも、一番望ましいのは学生が指導する先生の認識や世界観を超えてくれることですよね。そうじゃないと、単に先生のコピーを作り出すだけになる。指導する方もされる方も、キーワードは「自分で考える」こと。自分で考えた思考の跡は必ず写真に出ますから。「いい写真家はいい文章を書く」と言われているのも、それは思考が整っているから。今は石川竜一さんや金川晋吾さんといった、今後がますます楽しみな若手もいて、日本の写真の未来は決して閉ざされていない。僕はそう思い続けています。

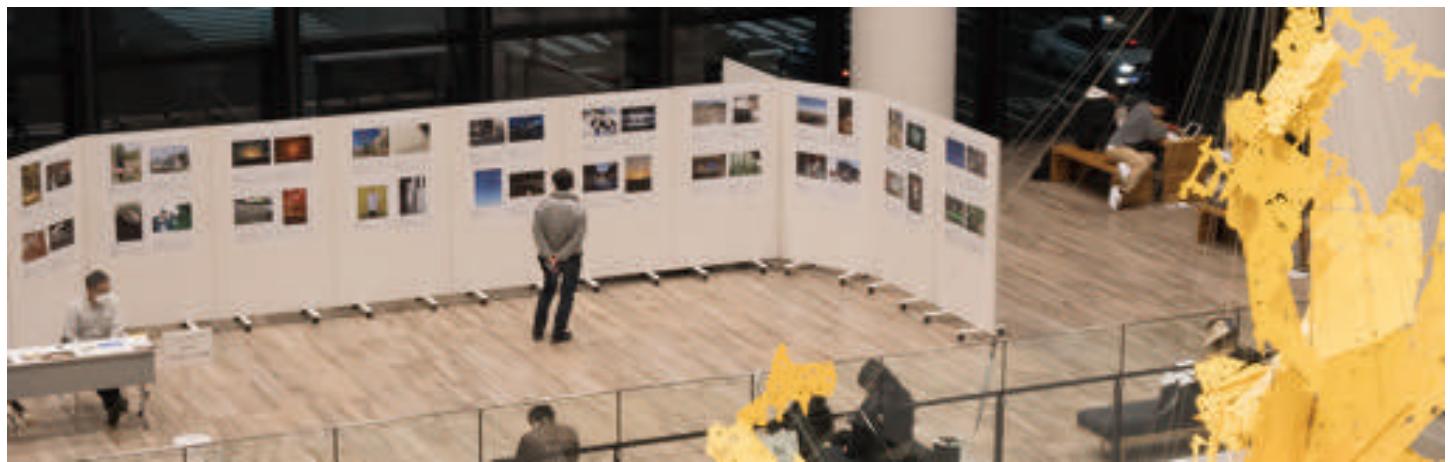




写真を撮って発表することの喜びを皆で共有する。

その積み重ねが写真表現の可能性を広げていく一つのきっかけになるんじゃないかなと思います。

—— 飯沢耕太郎



SapporoPhoto 2023 開催概要

2023年11月10日(金)～12日(日) 10:00～19:00

札幌文化芸術交流センター(SCARTS) 2階 SCARTSモールC

札幌市中央区北1条西1丁目 札幌市民交流プラザ内

主催

NPO法人北海道を発信する写真家ネットワーク

協力

北陽イベン株式会社

助成

[SapporoPhoto 2023]の各事業は、札幌市写真文化振興事業補助金を受け実施しました。

SapporoPhoto 2023 レポートブック／

公募参加型写真展『「変わる」の中で』作品集

発行人

中村健太

編集人

長谷川規夫

デザイン・記録撮影

ウリュウ ユウキ(ウリュウ ユウキ 制作室[madokara])

発行

THE NORTH FINDER

NPO法人 北海道を発信する写真家ネットワーク

060-0807 札幌市北区北7条西1丁目1-2 SE札幌ビル13階 (株)イメージナビ内

<https://northfinder.jp/> info@northfinder.jp

SapporoPhoto公式ウェブサイト <https://sapporophoto.northfinder.jp/>

印刷所

株式会社グラフィック

2024年3月発行

本誌掲載の作品写真の著作権は、各撮影者にあります。

本誌内容の無断転載をお断りいたします。

© 2023-2024

THE NORTH FINDERについて

NPO法人北海道を発信する写真家ネットワーク"THE NORTH FINDER" は、写真を通して広く北海道のイメージを高め、より深く北海道を知ってもらおうと、北海道をベースに活動する写真家有志が中心となって設立したNPO法人です。

会員による写真展の開催や、企業との連携を通じた発信のほか、写真教育や写真資産の活用、市民の皆さんにご参加いただくイベントなどの各種事業を通じて、広く写真文化発展へ貢献することを目指して活動しています。

あたたかいご支援とご協力をよろしくお願ひ申し上げます。

弊法人に関する詳しい情報は法人公式ウェブサイトでご確認ください。 <https://northfinder.jp/>



2023

